

演題名：鶏の腫大した肝臓病変の検討

発表者名：○山元朝香 牛島有紀 吉田崇 安座間明日香

発表者所属：北部食肉衛生検査所

1. はじめに

食鳥検査において、肝臓病変は一部廃棄として摘発されることが多いが、肝臓は全廃棄対象疾病の診断上重要な臓器のひとつである。今回、検査時にしばしば遭遇する腫大した肝臓に着目し、肉眼所見、病理組織学的所見の特徴から、病変の比較検討を実施した。

2. 材料及び方法

平成21年4月から平成21年1月の期間に管内A食鳥処理場に搬入された地鶏、ブロイラー（約40～94日齢）のうち、腫大を認め廃棄となった肝臓45検体を材料とした。定法に従い、HE染色、アザン染色、と銀染色を行い鏡検した。

3. 結果

胆管肝炎18検体、マレック病11検体、その他の肝炎16検体であった。

(1) 胆管肝炎

肉眼所見：退黄色～灰白色の放射状の病巣が肝全体にわたり密在していた。また、硬結感のある網目状の病変がみられる部位もあった。

組織所見：病変の程度には検体により差違がみられたものの、グリソン鞘を中心に偽好酸球やリンパ球の浸潤を認め、細胆管増生が確認された。細胆管周囲には膠原線維の増生をともなっていた。肉眼的に放射状にみられた病変部は、細胆管と膠原線維がより増生しており、それらが連結して肉眼的に硬結感を示す網目状の病変も散見された。

(2) マレック病

肉眼所見：8検体は大小様々な乳白色結節を形成していた。3検体は明瞭な結節が認められず、肝全体にわたり退色あるいはまだら状であり、色調、病変の領域に差がみられた。

組織所見：11検体全ての検体で、大小不同のリンパ球様腫瘍細胞が結節性あるいは慢性に増殖し、類洞内にも浸潤していた。肉眼的に結節として認められた部位は腫瘍細胞の結節性増殖により形成されていた。結節部以外および結節を形成していない検体については腫瘍細胞の浸潤の程度により差異があり、肉眼所見では様々な色調として確認された。

(3) その他の肝炎

肉眼所見：針頭大乳白色化膿巣病変から壊死病変、出血病変まで様々であった。

組織所見：巣状性あるいは慢性に、偽好酸球やリンパ球などの炎症細胞の集簇、浸潤がみられ、壊死巣や肝細胞の変性脱落を伴う所見もみられた。

4. 考察及びまとめ

胆管肝炎では、炎症の程度によるが、肉眼的に特徴である退黄色～灰白色の病巣となっていた。マレック病では、典型的な乳白色結節を形成している検体は肉眼的にその鑑別が容易であった。結節が認められない検体については、肝臓の色調などが胆管肝炎の肉眼所見と酷似している検体も認められたため、病理組織診断による類症鑑別の必要性を感じた。食鳥検査において、脾臓などの他の臓器の所見も含め総合判断していくことが重要であると考えられる。その他の肝炎については色調や病変が局限していることから鑑別が可能であった。